

教授行動・学習行動・学修成果 三位一体の可視化

—学習者中心の大学教育改革—

産業能率大学

松尾 尚（産業能率大学経営学部長、教育開発研究所長）

1 取組みの特徴

本学のAPにおける取組みには2つの特徴がある。第一に、学修成果の多面的把握の取組みにおいて、①教員の教授行動、②学生の学習行動、③学修成果の「3つの可視化」に一体的に取り組んだ点である。第二に、教育の質的向上を加速する上で「学習者」の視点にこだわった点である。

2 学修成果の多面的把握 ～教授行動・学習行動・学修成果の三位一体の可視化

学修「成果」の可視化とその活用に取り組む過程で、教授行動および学習行動という「プロセス」の可視化の重要性を認識し、授業内スタッツデータの測定、学生の授業外学習時間・リーディング量・ライティング量の調査（TRW調査）などに取り組んだ。

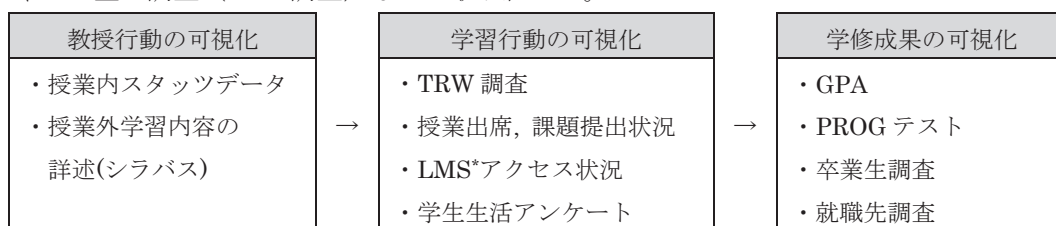


図1 三位一体の可視化

* Learning Management System

スタッツとは、統計を意味するstatisticsに由来する言葉で、スポーツにおける各選手のプレーやチームの成績に関する統計数値のことをいう。本学は教授行動の可視化を目的に、授業内スタッツデータ（授業における教員と学生のパフォーマンス、たとえば教員と学生の対話数、課題に対するフィードバック時間等）の測定を行った。また、学生の学習行動の可視化として、学生は授業外において何時間学習し、文献等を読み、レポート等を作成したかをLMSに入力している。両調査結果は、担当教員に示され、教員は授業設計と実際の授業運営の差異、想定した学習量と実際の学生の学習度合いを比較して自己評価し、授業改善を中心に教育の質的向上を図っている。

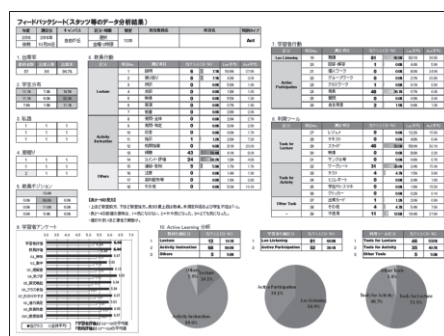


図2 授業内スタッツデータ結果例

3 学習者中心の大学教育改革の推進

本学は教育改革を学習者の視点から進めることにこだわった。具体的には、授業内スタッツデータの測定は、測定方法等のトレーニングを受けた学生が担当し、学生の視点から授業観察およびデータ測定を行った。また、授業改善を学習者行動の改善に着目して進めるため「学習者行動改善シート」を開発した。さらに、学生による学生のための学習支援「学びのピアサポート活動」を開始し、学生たち自身が授業外学習支援の企画・運営を行っている。

4 これまでの成果

AP中間評価においてS評価をいただいた。授業評価における授業満足率が上昇し（H26: 45.7%→H30:48.3%）、授業外学習時間が飛躍的に伸長した（H26:8.5時間/週→H30:16.7時間/週）。卒業生調査でも68.2%の卒業生が「大学で学んだことが仕事に役立っている」、アクティブラーニング型授業の受講経験のある卒業生のうち75.3%が「社会に出て役に立った」と回答した。また、学生の学修成果が企業から評価され、就職内定率は4年連続（H27-30）で99%を上回った。